

コロナ禍の訪問看護

一人ひとりに直接関わる訪問の現場から

訪問看護ステーション 看護師 河島 早希



訪問看護ステーションのメンバー

訪問看護にも新型コロナ

ナ感染拡大の影響はでています。不安の声や、中には訪問看護の休止を希望される利用者様もいらっしゃいます。休止の間、最低週一回電話で確認させていただいています。

訪問時には利用者様やご家族に不織布マスクの着用をお願いしています。

緊急事態宣言によりご家族が在宅勤務をされている場合もあります。普段ご家族にお目にかかる

在宅勤務の思わぬ効果

緊急性事態宣言によりご家族が在宅勤務をされている場合もあります。普段ご家族にお目にかかる

機会が少ない中、お話できる機会となりケアを見たいだけという良い面もありました。ご家族からも「ケアを見ることでよかったです」と話

なにより、日中は独居の利用者様が『コロナウイルスへの不安はあるけれど家族と一緒に時間が過ぎて嬉しい』『コロナの影響により人と接触が少なくなった今、かえって家族や訪問看護で楽しく話せて嬉しい』などと笑顔で話されます。

私達にとって嬉しく、一層気を引き締めて感染対策に留意しています。

1月18日、尾張健康友会グループ入職10年目の職員を対象に研修を開催しました。

第44回民医連総会方針のDVDを視した後、尾張健友会グループの歴史や自分たちの10年間の実践（平和行進や事例発表な

不安な声と暗いニュースが多く、落ち込みやすい中、少しでも楽しく安心して過ごして頂けるような関わりを心掛けてい

ます。一人ひとりに直接関わり、把握できる訪問看護だからこそ出来ることを大切に、今の状況に立ち向かいたいです。

後輩に伝えたいこととして、「ちあきは他の事業所で断られた患者を受けいれている」「利用者・患者の人權を尊重し、誰にでも平等に医療・介護を提供する職場」「無料低額診療もやっている」「金銭面や社会背景など、その人のことを受

け入れていくことから始めよう」「政治や社会にも目を向けていくことが必要」など、民医連で働く職員としての思いが挙がりました。

また育休明けの職員への研修体制などが整えられているなど、長く働き続けられる職場環境があるのも魅力として伝えたいと話されました。

「困った時にはいつでももちあきへ」と地域の方に言っていただけのような日々の実践を、今後入職してくる後輩たちにぜひ語り伝えていってほしいと思います。

職員育成委員 三宅桂子

訪問看護は看護師が訪問し、訪問診療では医師が同行します。訪問診療は月に一回が基本です。

訪問先では色々なお話を聞きました。患者さんのご家族は「医師や看護師が来てくれる事があるがたい」と話されました。高齢で通院が困難な方には、医療者が訪問することで継続した医療・看護の提供が出来、患者さんやご家族の安心につながっていると感じました。

私たち病棟看護師が退院支援を行うにあたり病棟で取り組むべき

訪問看護は看護師が訪問し、訪問診療では医師が同行します。訪問診療は月に一回が基本です。

職員学術運動交流会から①

退院後を見ずして訪問に同行

病院内では見えなかつたもの

千秋病院B3病棟 看護師 川田 貴美子

B3病棟は、地域包括ケア病棟として在宅・施設に向けて退院を

支援する役割を担っています。しかし私たちが退院後の患者さんとお会いすることはほとんどないです。在宅患者さんの生活を知る機会がありません。

そこで退院した患者

訪問看護は看護師が訪問し、訪問診療では医師が同行します。訪問診療は月に一回が基本です。

訪問先では色々なお話を聞きました。患者さんのご家族は「医師や看護師が来てくれる事があるがたい」と話されました。高齢で通院が困難な方には、医療者が訪問することで継続した医療・看護の提供が出来、患者さんやご家族の安心につながっていると感じました。

私たち病棟看護師が退院支援を行うにあたり病棟で取り組むべき

訪問看護は看護師が訪問し、訪問診療では医師が同行します。訪問診療は月に一回が基本です。

訪問先では色々なお話を聞きました。患者さんのご家族は「医師や看護師が来てくれる事があるがたい」と話されました。高齢で通院が困難な方には、医療者が訪問することで継続した医療・看護の提供が出来、患者さんやご家族の安心につながっていると感じました。



千秋病院研修医日誌 ③⑤ 「蘇生の知識、技術」は一生モノ

1年目研修医 伊丹 慶輔

1月4日より1ヶ月間、総合大雄会病院麻酔科にて研修を行ってきました。麻酔科といえば「手術の時に患者さんを眠らせている科」というイメージを持つ方が多いと思います。全身麻酔を受けている状態であれば自発的な呼吸も止まり、血圧も低下します。手術の内容によっては出血が大量に起こる事もあるでしょう。いわば身体

が一時的に死に近い状態になるため、対応も迅速かつ的確に行わなければなりません。実際に麻酔科を回って感じたことは、麻酔科医というものは「麻酔をかけるプロ」であると同時に「蘇生のプロ」でもあるということです。意識が無くなった、呼吸が止まった、出血して血圧が急激に下がった等の場面は、手術でなくとも病棟でも当然起こりうるものです。今回麻酔科で学んできた「蘇生の知識、技術」は一生モノであると感じています。



後輩に伝えたいこととして、「ちあきは他の事業所で断られた患者を受けいれている」「利用者・患者の人權を尊重し、誰にでも平等に医療・介護を提供する職場」「無料低額診療もやっている」「金銭面や社会背景など、その人のことを受け入れていくことから始めよう」「政治や社会にも目を向けていくことが必要」など、民医連で働く職員としての思いが挙がりました。また育休明けの職員への研修体制などが整えられているなど、長く働き続けられる職場環境があるのも魅力として伝えたいと話されました。「困った時にはいつでももちあきへ」と地域の方に言っていただけのような日々の実践を、今後入職してくる後輩たちにぜひ語り伝えていってほしいと思います。職員育成委員 三宅桂子